

2 第2分科会（私立西部地区）

＜協議主題3＞

幼稚園教育と小学校教育との接続の推進について

(1) 主題について

幼稚園は、遊びや生活を通しての経験が学びにつながる総合的な教育の場であり、教科教育を中心とする小学校とは、教育の内容や方法、生活環境が異なる。幼児にとっては、この違いが戸惑いとなり、円滑に小学校生活に移行できないこともある。そのような問題を解消し、小学校入学後に子供たちが速やかに学校生活になじむことができるようにするには、相互の教育や子供理解を深めていくことが大切だと考える。そこで、「教職員同士の交流・連携」「子供同士の交流」「保護者との連携」という3点から幼稚園教育と小学校教育との接続の在り方について考えていくことにした。

当園は、これまでも幼小の連携として、近隣の小学校と2園の認定こども園と共に、年長児と小学生との交流活動の他、教師間の意見交換会等を行ってきた。しかし、主に小学校発信の連携として取り組んできており、幼稚園側としては受け身的な体制になりがちであったのが現状である。幼稚園側も積極的な発信を行い、幼稚園と小学校の教師が、子供の姿を語り合って、育ちや学びの共有をし、幼児理解が深められる交流や連携を検討していきたい。また、幼児が安心感や期待感をもって就学するためには、保護者の支えや見守りが必要であるため、家庭との連携の在り方も考えていきたい。

(2) 研究の視点

- ① 相互の教育の理解や子供の姿、学び等の理解を深める。
- ② 子供の育ちや学びをつなげていくための交流や連携の在り方を考える。
- ③ 就学に向けて、滑らかな接続ができるよう家庭との連携の在り方を考える。

(3) 実践事例

① 交流活動(教師間の交流も含む)

学期	年月日	交流内容	教師間の話合い
2 学期	平成30年 12月13日 (※事例1)	● <u>小学2年生と年長児との交流</u> ・2年生との交流会「遊びランド」に参加する。	・遊びランドについて、活動を振り返り、意見交換をする。
3 学 期	平成31年 2月7日	● <u>幼稚園給食参観</u> ・小学校教師が来園し、小学校と同じ給食メニューを食べる。 ・小学校教師から子供たちに学校給食の仕方や学校生活について教えてもらう。	・参観を振り返り、食事状況等を共通理解する。 ・子供たちの様子について意見交換をする。
	平成31年 2月12日 (※事例2)	● <u>小学校見学</u> ・幼稚園児が1年生の授業を見学する。 ・学校探検をする。	・見学のねらいや活動内容について事前打合せをする。 ・見学後、意見交換をする。
	平成31年 2月17日	● <u>幼小連絡会</u> ・1年間の幼小連携について話し合う。	・幼小連携の成果や課題を話し合う。 ・一人一人の様子を共通理解する。

学期	年月日	交流内容	教師間の話合い
1 学 期	令和元年 5月28日	● 小学校授業参観・幼小連絡会 ・旧担任が1年生の授業を参観し、意見交換をする。	・参観を振り返り、授業の内容や子供たちの成長、課題について話し合う。 ・幼小連携の共通理解をする。
	令和元年 6月24日 (※事例3)	● 公開保育及び研究協議会 ・小学校教師(1学年主任)が来園して保育参観や協議会、意見交換をする。	・参観を振り返り、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、子供の姿について協議する。 ・幼小連携の意見交換をする。
	令和元年 7月25日	● 小学校特別支援コーディネーターの園訪問 ・年長児の保育参観をする。	・年長児の様子を共通理解する。 ・個別支援が必要な子供を中心に話し合う。

② 事例1 年長児と小学校2年生との交流「遊びランド」

- 参加者 年長児:45名 小学2年生:102名 他近隣2園の年長児:51名
- ねらい<幼稚園>・友達と一緒に2年生のつくったいろいろなゲームコーナーで興味や関心をもって遊び、小学生との関わりを楽しむ。
- <小学校>・相手のことを想像したり、伝えたいことを選んだりする。
- ・身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かる。
- ・進んで触れ合い、交流しようとする。

◎活動内容・年長児の姿

- ・ゲームコーナー(魚釣り、的当て等)で遊び、ゲームカードにシールを貼ってもらう。

○前日	・手づくり招待状を一人一枚もらい、「早く行きたいね」などと当日の活動を楽しみにしている姿がみられた。	
○ボウリング	・遊び方が分からず戸惑っている幼児に、2年生が遊び方を教えてくれた。また、「6本倒れたね」などと、声を掛けてもらい、関わりを楽しんでいた。	
○魚釣り	・魚の名前を質問したり、カードを見せて集めたシールの数を伝えたりする姿がみられた。少しずつ場に慣れてきたことで、積極的に遊びに参加していた。	

<後日行った小学校教師との意見交換>

○小学校より

- ・人のために何かをすることの喜びに気付けるよう、相手意識をもって活動できるような言葉掛けをした。子供たちは招待状を読んでもらうためにきれいに書こうとしたり、年長児との関わり方を考えたりしながら、遊びランドを進めていくことができた。
- ・2年生が年長児に対して、遊びランドをどう感じたのかを直接聞く機会をとらなかった。活動の中で2年生が年長児にインタビューするなど、年長児の感想を2年生に伝えられる場をつくるとよいのではないかと思った。また、2年生は遊びランドを終えた後に振り返りの場を設けなかったため、今後の活動につなげるための事後活動があった方がよいと感じた。
- ・年長児は人の目を見て話を聞き、小学校という初めての環境に戸惑うことなく、しっかりと遊びのルールを守って参加していたように思う。

○幼稚園より

- ・前日に2年生からももらった手づくりの招待状を教師が一人一人に渡すことで、期待感をもって小学校に行くことができた。また、ゲームカードがあることで友達と相談して遊ぶコーナーを決めたり、目的をもって遊んだりすることができていた。
- ・各コーナーにいろいろな廃材を組み合わせて、工夫した遊びが見られた。幼稚園で経験した遊びが小学校での活動に生かされていると感じた。
- ・子供たちはゲームカードを家庭に持ち帰り、活動について保護者に伝えたことで親子共に学校への期待が高まったようだ。

< 考察 >

視点 1 より

- ・これまでの交流は、小学校と幼稚園それぞれのねらいや詳しい内容、これまでの経緯等の打合せがないまま進めてきた。今回、交流後ではあるが意見交換を行ったことで、幼稚園と小学校の教師が相互の思いや教育内容を知ることができ、それぞれの教育の理解ができた。また、次年度の交流活動につなげるよい機会になったと思われる。
- ・交流活動の前にも幼稚園と小学校の教師間の話合いの場を設け、それぞれのねらいを共通理解しておけば、教師間の意識も高まり、より効果的な交流をすることができたのではないかと考える。

視点 2 より

- ・2年生に遊び方を教えてもらい、優しく関わってもらったことで、子供たちは小学校や小学生のイメージを自分なりにもつことができたようだ。また、学校にも遊びの時間があることが分かり、学校への期待や楽しみが大きくなったようである。

視点 3 より

- ・家に持ち帰ったゲームカードが親子で小学校の話をするきっかけとなったようである。また、2年生と遊んだことや面白かったゲームのことをうれしそうに話す子供たちの姿から保護者の就学への意識や期待感を高めることができたのではないかと考える。

③ 事例 2 学校探検（小学校見学）

○ねらい ・教室や授業の様子を見て、小学校の様子を知り、就学への期待をもつ。

◎小学校との事前打合せ

- ・小学校見学においてのねらいと目的を伝える。
- ・子供の姿や思い、教師の願い、行いたい活動内容を伝え、取組を共通理解する。

◎事前活動

- ・小学校をテーマにした絵本「1ねん1くみの1にち」「えらいこっちゃんのいちねんせい」を見る。

◎活動内容・年長児の姿

○授業見学：算数

- ・1年生の先生が持っている大きな時計や1年生が一人一個持っている時計に興味を示す。先生の質問に、「はい」と手を挙げて答える姿に友達と「すごいね」「早く勉強してみたいね」と話していた。



○教室見学

（体育館、コンピュータ室、図書室、音楽室、図工室、理科室、家庭科室）

○図書室にて

- ・たくさんある本の数やその種類の多さに驚く。多くの幼児が「借りてみたい」と話す。名前の書いてある板（台本板）が本の間に置いてあることに疑問をもち、先生に質問するなど、興味深く見学していた。



○質問タイム

- ・見学を終え、先生に「何時までに学校に来ればよいか」「遊ぶ時間はあるか」など手を挙げて、積極的に質問をした。「小学校に入るまでにできるようになっていたらいいことは？」の質問に「自分でできることを一つでもよいので増やしてください」「勉強は学校に入ってからするので、今できなくても大丈夫ですよ」とやさしく答えてもらい、「勉強しておかなくてもいいんだ」と笑顔で話をしていた。



○1年生の教室の座席に座る

- ・好きな座席に座り、担任の先生に名前を呼んでもらい、手を挙げて、元気に「はい」と返事をする。友達と「小学生みたいだね」「早く学校来たいね」とうれしそうに話をしていた。



◎見学を終えて（保護者からのお便りより）

- ・保護者に小学校見学の様子を知らせるお便りを出したところ、保護者から多数の返事をもることができた。

- ・実際に小学校で生活の様子を感じて、雰囲気を知ることができ、不安等がなくなり心の準備も少しはできたのではないかと思います。
- ・ひばり園と違う所やたくさんの部屋があり、黒板の大きさ、机の大きさ（一人の机がある）、机の向き、授業の時間と遊ぶ時間、体育館の広さ、本の多さ等、びっくりすることがたくさんあったみたいです。いろいろなところが、ひばり園とは違っていたことが分かり、小学校にとっても期待をもったようです。

◎事後活動「学校探検ボードをつくろう」

- ねらい ・小学校見学を振り返り、就学への期待をもてるようにする。

◎活動内容・年長児の姿

○話し合い

- ・「どんな教室があり、何をする教室なのか」や小学校での楽しみなこと等を伝え合い、担任が子供の思いをボードに記入していく。
友達の意見に「僕もそう思う」「私も一緒」など、みんなも同じ思いであることが分かり、笑顔で話をする。



<後日行った小学校教師との意見交換>

○小学校より

- ・案内をしたり質問を受けたりする時は、年長児が少しでも安心して見学できるよう心がけた。
- ・年長児が積極的に多くの質問をしたことに驚いた。見学している姿が主体的で、学校に興味をもって見学していたからこそ、疑問が生まれ、聞いてみたいという気持ちになったのではないと思われる。これは、幼稚園教師が就学への期待をもてるよう、意図をもって関わっていたからだと思われる。
- ・自分で質問して答えが分かったという経験から、年長児は親にもキラキラした目で話をしてくれたのではないだろうか。
- ・今回のような年長児の姿が、就学に対する保護者の安心につながれば、親子共に入学を楽しむのではないと思う。

○幼稚園より

- ・見学前に小学校の絵本を見るなどして、一人一人が自分なりの思いをもって見学に行けるように心がけた。初めは、少し緊張している様子もみられたが、案内して下さった小学校教師の温かい雰囲気に自然と笑みも生まれ、質問も活発にすることができたように感じた。
- ・座席に座り小学生気分を味わえたことで、さらに小学校に対しての思いや期待感が膨らんだように思う。
- ・授業を見学し、勉強に不安を感じた子供もいたが、小学校教師が子供たちの姿を受け止め、安心できる言葉掛けをして下さったので、不安も和らいだようである。
- ・子供たちは、小学校教師の話を家庭でも伝えたようで、今からできることを進んで取り組んでいる姿（夜、寝る前に登園の準備をする、一人で起きる練習をするなど）があると、多くの保護者からの反応があった。

<考察>

視点1より

- ・事前打合せで小学校教師に見学のねらいや内容等を伝え、幼小の教師間で共通理解を図った。教師同士が思いを共有し、ねらいに応じた関わりができたことで、子供たちが小学校生活のイメージをもつことができたようだ。また、活動を振り返って小学校教師と子供の姿を語り合ったことで、今、子供たちが育っている姿や学びを共有することができ、子供理解を深めるよい機会となった。

視点 2 より

- ・授業を見学したり、椅子に座ったりする経験をしたことで、子供たちは小学生気分を味わうことができ、小学生になる期待感をもつことができたと考ええる。
- ・見学後に話し合いをし、探検ボードをつくったことで、「早く勉強をしてみたい」「図書室で本を読みたい」などと小学校への期待や楽しみをみんなで共有することができ、小学生になる楽しみを一層膨らませることができた。

視点 3 より

- ・子供たちが保護者に見学のことを進んで話したり、園からも見学の取組を保護者に発信したりしたことで、家庭でも子供と楽しく小学校の話題を共有できたようである。また、子供の姿に刺激を受け、就学に向けてできることを一緒に前向きに取り組んでいる保護者の様子がみられ、保護者の意識にも変化があったことが分かった。

< 1 年生になった保護者の声から >

- ・無事に学校生活を送っていきけるか心配でしたが、親の心配をよそに入学当初から元気に登校しています。毎日の宿題は大変そうですが、親も一緒に取り組むようにしています。また、自分で翌日の時間割を確認して一人で準備ができるよう今後も見守っていきたいです。

- ・子供も保護者も就学に対して不安を抱えている。小学校見学等の交流が小学校への不安を少なくし、小学校への段差を小さくすることにつながると思うので、今後も継続していきたい。

④ 事例 3 幼小研究会「ひばりンピックをしよう」(保育参観)

○ねらい・チームの友達と思いを伝え合いクラス全体で遊びを進めていくことの楽しさを味わう。

- ・思いきり体を動かしたり友達と競い合ったりしながらひばりンピックを楽しむ。

◎小学校との事前打合せ

- ・指導案等を持参し、活動の経過や幼児の姿、ねらい、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿等について話をする。

◎活動内容・幼児の姿

- ・日本とアメリカチームに分かれ、聖火点灯、綱引き、リレー等をして遊ぶ。

○前日（会場準備）

- ・クラスみんなで手づくり国旗を飾ったり、遊びに必要なものを準備したりしながら、ひばりンピックを楽しみにしている様子がみられた。



○聖火点灯

- ・ペアの友達と聖火を慎重に運んだり、「熱いよ」と声を掛けたりして、自分なりに聖火点灯のイメージをもちながら次の友達に聖火をつなぐ姿がみられた。



○リレー

- ・チームごとに話し合って走る順番を決めた。日本チームはアンカーになりたい男児が二人いた。二人で話し合い一人の男児が「僕、我慢する」と言い、もう一人の男児がアンカーとなる。レースでは友達と競い合って遊ぶ姿がみられた。



< 小学校教師との意見交換会 >

○小学校より

- ・綱引きのチーム決めやリレーのアンカー決め等では友達のためにという思いから、自分の気持ちを調整して我慢をする幼児がいた。
- ・自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりしながら話を進めていて、伝える力がついてきていると思った。自分の思いや考えを言葉で表現することは小学校でも非常に重要なことであり、これからはいろいろな活動を通して言葉で伝える力を育ててほしいと思う。
- ・園内の様々な環境も「豊かな感性と表現」の育ちになっていると感じた。幼稚園で養われた育ちを小学生になっても発揮していけるよう、指導の仕方と考えていきたいと思う。
- ・今回の活動では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の『健康な心と体』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』の三つが軸となっていると感じた。

○幼稚園より

- ・話し合いを重ねることで、今まで自分の思いを伝えられなかった子供が考えを伝えられるようになったり、友達の思いに耳を傾けたりすることができるようになってきた。また、自分のことだけでなく友達のことを考えながら関わられるようになってきた。
- ・今回の遊びを通して、クラスの間と力を合わせて遊びに取り組む楽しさや競い合うおもしろさを感じていた。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにグループワークをしたことで、今回の姿がどの育ちにつながっていくのかをみんなで共有することができた。



< 考察 >

視点1より

- ・小学校との事前打合せで活動の経過や子供の姿を具体的に話したり、参観のポイント等を伝えたりした。また、一緒に保育を参観しながら子供の育ちの状況を伝えていくようにした。小学校教師に、幼稚園の子供たちの遊びや生活の実態を少し理解してもらえたのではないかなと思う。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校教師と幼児の遊びから育ちや学びについて話し合うことができた。また、幼小の教師が同じ保育を参観し、子供の姿を語り合ったことで、幼児理解や育ちの共有につながったと考える。

(4) 実践より明らかになったこと

① 相互の教育の理解や子供の姿、学び等の理解を深める

- ・交流や参観ごとに事前の打合せや事後の振り返りを行うことで、小学校教師に幼稚園でのいろいろな経験が小学校の学習につながっていると感じてもらえることができた。また、幼小の教師間で互いに保育、教育観の学びを得ることができ、今後の指導に生かすことにもつながった。活動のねらいや願い、相互の関わりを明確にして、伝え合うことが双方の教育の理解を深めるために大切であることが分かった。

② 子供の育ちや学びをつなげていくための交流や連携の在り方を考える

- ・幼稚園教師は1年生が生き生きと授業に臨み、発表している姿を見て、自分の思いを言葉で伝える力を身に付けておく必要性を感じた。また、小学校での子供たちの活動の様子を小学校教師から聞き、失敗してももう一度挑戦しようとする前向きな気持ちを育てることの大切さを感じた。
- ・見学では事前に小学校教師に幼稚園側のねらいや思いを伝えておいたことで、関わり方を考えてもらえ、充実した活動にすることができた。この取組を通して、幼小連携の活動では、事前の打合せが非常に重要であると感じた。また、1年生の教室で椅子に座ったり、担任に名前を呼んでもらい返事をしたりするなど、小学生と同じことを経験させてもらえたことが小学校への肯定的なイメージを生み、期待感や自信をもたせることになったと思う。

③ 就学に向けて、円滑な接続ができるよう家庭との連携の在り方を考える

- ・円滑な接続をするためには、子供たちに小学校への安心感や期待感を育むことが大切であり、そのためには保護者のサポートが必要である。しかし、保護者も就学への不安を感じている。そこで交流活動の様子をお便りで知らせたり、写真掲示をしたりして、継続して幼稚園からの発信をしてきた。それが、保護者の安心感につながったと思う。また、子供たちが楽しい交流を経験することで、家庭でも保護者に生き生きと話をし、そのことが保護者の心を動かして温かく、前向きにサポートすることにつながったと感じた。

(5) 今後の課題

- ・幼稚園において遊びや生活を通して育まれてきたことが、小学校での学習に円滑に接続されるようなカリキュラムを検討し、さらに幼小の連携を深めていきたい。

(6) 協議の概要

① 質疑応答

Q：小学校と交流していく中で一番難しいと感じたことは何か。

A：幼稚園が「こんなことをしてみたい」と思っている、小学校側に受け入れてもらえるのか分からないということが多く、小学校との折り合いのつけ方が難しいと感じる。

Q：小学校の人事異動がある中、交流を続けるために工夫した点は何か。

A：異動がなかった教務主任とのやり取りを中心に、今までの経過や意図を具体的に伝えるようにした。

② グループ協議（3色の付箋に書き、それを基にグループ毎に協議した）

○自園でやってみたいこと（ピンク色）

- ・事前事後の打合せ
- ・幼小の合同研修会（公開保育や研究発表）
- ・小学校見学
- ・保護者への発信（ボードの活用）
- ・教師同士での意見交換等

○今行っている取組（水色）

- ・交流会（学校見学、授業参観、訪問交流、お楽しみ集会、カレーパーティー等）
- ・就学予定の子の情報交換
- ・小学校教師の幼稚園参観等

○連携していく中での課題や悩み（黄色）

- ・校長、教頭先生が変わると継続が難しくなる。
- ・園行事との調整が難しい。 など

(7) 指導・助言

① 相互の教育への理解や子供の姿、学び等の理解を深めるための手立て

- ・幼児の発達と学びの連続性を確保するためには、成長を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違い、共通点について理解を深めることが必要になる。幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るために小学校教師との意見交換会や合同研修会、保育参観や授業参観等で連携を図ることが大切である。
- ・幼稚園が活動のねらいや何のためにどんな活動をしたいのかを事前に伝えておくことで小学校はねらいに迫れるような活動を用意しておくことができる。
- ・限られた時間の中で、連携の機会はなかなかとれないと思うが、事前の打合せや事後の意見交換を大事にするなど、指導者の意識を変えるだけで、同じ交流でも中身の濃さが変わる。
- ・入学してくる幼児がどのような育ちをしているのか知っておくことは重要なことなので、交流の際は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに幼児の育ちについて話し合ってほしい。

② 子供の育ちや学びをつなげていくための交流や連携の在り方について

- ・異年齢の幼児と関わることで相手意識が芽生え、相手のことを考えて人間関係を築いていこうとする態度が育つ。
- ・幼児が児童と同じ体験をさせてもらうことで、小学校生活への期待を膨らませることができる。

③ 就学に向けて円滑に接続できるようにするための家庭との連携の在り方について

- ・幼児が安心感をもって就学するためには保護者の支えや見守りが不可欠であり、家庭との連携はとても大事である。幼児が児童との交流をうれしそうに家庭で話したり、交流での園児の様子を園から保護者に発信したりしていくことで、保護者の不安を軽くすることができる。今後も、そのような情報交換を大事にしていってほしい。

3 第3分科会（私立富山・新川地区）

＜協議主題5＞

幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるような環境の配慮や指導の工夫について

(1) 主題について

近年、想定外の災害や事故、事件が多く、幼児期から全ての幼児の安全意識を高めていく必要性を感じる。幼稚園生活の中で安全に関する意識や態度を育てていくことは、幼児一人一人が生涯にわたって健康、安全で幸福な生活を送るための基礎となる。

幼児が安心して伸び伸びと遊びに夢中になったり、体を動かしたりする生活の中で、危険を予測できず事故等が発生することがある。又、予期せぬ災害が起こる可能性もある。そこで、幼稚園生活が幼児の安全を守る教育環境であるか見直すとともに、幼児が守られるべき対象であるにとどまらず、園の教育活動全体を通じ自らの安全を確保することのできる基礎的な資質・能力を継続的に育成していくことが大切である。

(2) 研究の視点

- ① 幼児が安全に生活するための環境の在り方を探る。
- ② 保護者や外部機関との連携の在り方を探る。

(3) 実践事例

《対象クラス》 4歳児（年中組）男子10名 女子10名 計20名

クラスの半数が早生まれの子供である。また外国人幼児が2名在籍している。年少の時から自由遊びの際には自分の思いを通そうとすることが多く、トラブルや衝動的な行動が多かった。子供たちとの信頼関係を築き、子供たちの思いを受け止めながら子供たちが楽しく安全に遊ぶ力を身に付けられるように繰り返し指導してきた。

○エピソード1 『子供たちと教師との関わりから』

《対象児》 4歳児 B児

- ・B児は年少の時、欠席が多く、なかなか園生活になじめなかった。教師の傍に居ることや友達と遊んでいる様子を見ていることが多かった。

登園した子供たちは異年齢で過ごし、自分の好きな遊具で遊ぶ。
ままごとをして遊んでいた年少児のA児が、食べ物の模型をかごから投げて全部出した。B児は「これ、食べ物だからお皿に並べよう。投げたら当たると痛いし、踏んだら危ないからね」と声を掛けながら拾っていた。その姿を見て、A児も一緒に拾った。



《考察》

子供の年齢に応じて園生活を安全に過ごす意識や態度を育てていくために、年少の時に教師が子供たちに繰り返し伝えていく関わり方が大切だと感じた。年少の時には遊びのルールや約束ごとがあることをしっかりと伝えることが大切であり、それが子供たちのその後の安全に過ごすための生活習慣へとつながると感じた。又、他児への安全意識の広がりにもなっているのではないかと感じた。

『自分たちで気付いていって欲しいという教師の願いと子供の思い』

《対象児》 4歳児 C児とD児

- ・C児とD児は想像力が豊かで、自分で考えて物を作ったり、工夫したりすることが得意である。しかし、遊びに夢中になりすぎて周りが見えなくなることがある。C児は年少の時に廊下を走っていてけがをして病院で治療を受けたことがある。

進級して約2週間。新しい環境にも慣れ、自分のしたい遊びを楽しむことから友達と一緒に楽しむ遊びへと変わっていった。ブロックで飛行機をつくっているC児とD児。「体に大きな羽つけたらカッコいいね」「どうやったら速く飛ぶ飛行機つくれるかな」「急いで完成させよう」速く飛ぶ飛行機づくりへの会話がはずむ。その後、完成した飛行機を並べて遊んでいたが、しばらくして教室の中を走りだすC児とD児。教師は遊びの様子を見守っていたが、走る速度が速くなっていったので・・・。

事例	子供の姿から教師が感じたこと
教師： 「お部屋の中は、走りません」と、声を掛けた。 C児とD児： 「・・・」 教師： 「どうしてお部屋の中は走ったらだめなの？」 C児とD児 ① <u>「だってぶつかったりしてけがするから」</u> 教師： 「そうだよ。こぼと組(年少)の時C君走っていてけがをしたね」 C児： ② <u>「だって、飛行機つくったから空を飛んでるみたいにしたかったから」</u> 教師： 「お空飛んでいるようにしたかったんだね」 C児とD児 「分かった・・・」 その後C児とD児は歩いて遊んでいたが、飛行機を思い通りに空を飛ばせないことから表情は暗く感じた。 その後も部屋の中を走ることがあった。周りの子供たちが「お部屋は走らないよ」と声を掛ける姿もみられた。 C児とD児は「分かったよ」と言い、走ることを止めるがしばらくすると楽しそうに走っていた。教師は子供同士で声を掛け合っていることもあり、見守ることにした。 ◎ 6月の運動会で、曲に合わせてバルーン体操を演じる。子供たちは歌詞の中の「走りだせ！走りだせ！」という部分に気に入って、練習の後C児は「走りませ～ん。走りませ～ん」と歌い出し、手足を動かしていた。 教師： 「おもしろいね」 C児： ③ <u>「お部屋と廊下は走りませ～ん。走りませ～ん」</u> みんな： ④ <u>「走りませ～ん。走りませ～ん」と、笑顔で繰り返し歌う。</u> 教師 「そうだね」 ◎ 教室に戻り自由遊びをする。C児とD児は、ブロックで飛行機をつくり始める。出来上がった飛行機でいつものように飛んでいるように見立てて遊ぶが、走らず歩いていた。片付けの後、教師が走らず歩いていたC児とD児の頭を撫でると、二人はにっこり笑った。C児が「今日の飛行機は⑤<u>進化した飛行機だったんだよ</u>」と教えてくれた。教師は「カッコいい」と言って一緒ににっこり笑った。	①より ・日頃の教師の声掛けにより、お部屋の中を走ると危険なのでよくないことだということは理解している。 ②より ・遊びの中で子供たちは自分たちのイメージを表現する気持ちが育ってきている。  ③より ・バルーン体操の活動を思い切り楽しめたので、自然と替え歌が出てきたのではないかと考えた。 ④より ・友達が自分の思いに共感してくれたことが嬉しかったのではないかと考えた。 ⑤より ・走らないという約束を守れたことを教師が気付いてくれ、受け止めてくれたことが嬉しかったのではないかと考えた。

《今後の課題》

- ・子供が友達と一緒に生活や遊びの中で、自ら危険なことに気付き、安全を確保する方法を身に付けるようにする手立てはないか。
- ・教師の言葉や関わり方で安全について子供たちに分かりやすく伝える方法にはどのようなものがあるか。

《考察》

- ・年中になり、年少の時の経験や体験を生かしながら、教師の言葉掛けや働きかけばかりではなく自分たちで考え気付き安全に関する意識や態度が育つように、見守ることが重要であるとする。
- ・広い音楽ホール（遊戯室）で思い切りリトミックをして体全体で動き飛行機を表現できるようにした。子供たちの思いが他の方法で実現できるよう工夫することが大切だと考える。



○事例2 5月20日（月）『友達の姿を見て…自分で気付けたよ』

《対象児》 4歳児 E児

- ・E児は、月齢が低いこともあり自分の荷物の片付けやクラス活動での約束等が身に付きにくく、周りを見て行動することが苦手である。

事例	子供の姿から教師が感じたこと
◎ 音楽ホールへ移動する際、①椅子を机の下に片付けたE児。以前に椅子を机に片付けないで、自分の椅子でつまずいたことがあった。 E児： ②「Eちゃん、今日椅子入れたよ」と嬉しそうに言う。 それを見ていた友達が自分の椅子が片付いていないことに気付き、椅子を片付けに戻った。 E児： ③「～ちゃんも椅子入れたね」と言って二人で手をつないで廊下に行った。	①より ・以前椅子でつまずいたことを思い出し、自分で椅子を片付けたのだろう。 ②より ・椅子を片付けたことを誰かに伝えたかったのだろう。 ③より ・友達が自分の姿を見て椅子を片付けたことが嬉しかったのだろう。

《今後の課題》

子供が失敗した体験を自分で気付き、生かしていくために、教師はどのような関わりをしたらいいか。

《考察》

失敗した経験は幼児が自ら危険を避ける能力を育てる学びの機会となる。幼児が、友達の姿を見て気付けることは、集団生活の中での学びであり、子供たちが成長していくためには大切であると考えた。



○事例3 5月末～6月『友達と一緒に遊びの中から』～みんなで片付けよう～

《対象児》 4歳児クラス

- ・年中になって2か月。安全に対する意識について教師からの発信ばかりではなく、自分たちで気付き伝え合う姿も増えた。運動会に向けクラス全体での活動が多くなった。このような姿から教師はクラス全員での遊びを展開するために、子供たちが最近興味を示している積み木を使つての遊びを提案した。積み木では、迷路遊び、おうちごっこ、お店屋さんごっこをして遊んでいた。

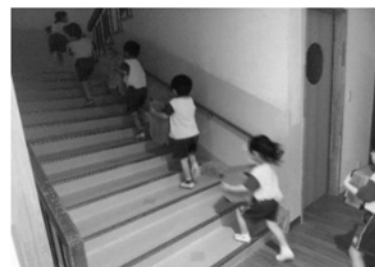
事例	子供の姿から教師が感じたこと
積み木を高く積む子に ①「高く積んだら危ないんだよ」「倒れてきたらぶつかるよ」 と言って近くに居た幼児は積んだ積み木を降ろす。 ②「でも積んだら綺麗に片付けられるんだよ」 と言ってさっき積み木を積んだ幼児は又積み木を積む。 あちらでもこちらでも同じ声が聞こえた。片付けられないこともあり積み木をそのままにして子供たちが帰ることもあった。 数日後③「先生、積み木を綺麗で危なくないようにするときはどうやって片付けたらいい」と聞きにくる。 「みんなで一緒に考えようか」と、教師は答えた。 教師は子供の意見を文字と絵で表した。 ④「3段まで積むなら危なくないように」「同じ形を集めよう」「線をつけよう」「小さい積み木から片付けよう」等という意見が子供たちから出てきた。 教師は、積み木の片付け方が視覚的に分かるように写真で撮って示した。 ⑤最初はなかなか上手に片付けられなかったが、毎日片付けていくうちに自分たちで考え、綺麗で危なくないよう片付けられるようになった。	①②より ・どうやって片付けたらよいか自分たちで考え言葉で伝え合い友達の思いも聞こうとする力が育っている。 ・積み木遊びを十分に楽しんでいるので片付けも遊びの一つと捉え取り組んでいるのだろう。 ③より ・安全に対する意識が芽生えている。子供たちは先生がどう言うのかなと思いながら聞いているのだろう。  ④より ・自分の考えを発表できることを嬉しく思っているのだろう。友達や先生に自分たちの意見を受け入れてもらえることを嬉しく思っているのだろうと感じた。 ⑤より ・自分たちで考えた片付け方なので根気よく楽しみながら片付けられているのだろう。

《今後の課題》

みんなで考えたりみんなの前で発表したりする機会を増やすためにはどのような活動を計画したらよいか。

《考察》

子供の興味・関心に合わせ、クラス全体で取り組める遊びや活動を取り入れることで、子供たちは遊びに夢中になり、遊びが広がる楽しさから片付けも遊びの一つと捉えたと考える。教師に思いを伝え一緒に考え共有したことで、友達と一緒に考えた片付けに何度も挑戦し、納得した片付けができたことは子供たちの満足感や達成感につながったと考える。



○エピソード2 『園生活で様々な経験や体験を通して学んだこと』

《対象児》 4歳児クラス

① 四季防災館で体験し学んだこと

- ・積み木で家をつくる。家には屋根がない。すると…
「このお家で地震になったらダンゴムシになろう」
「ダンゴムシ」
子供たちはダンゴムシの真似をして丸まった。
- ・「火事の際はあそこから逃げようね」と、非常口の案内板を指さした。

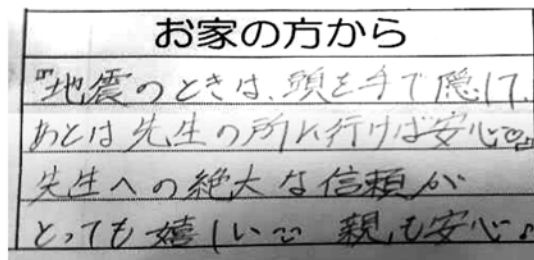


② 外部の関係機関の「防犯教室」で学んだこと

送迎バスでの出来事である。車で走行していた卒園児の保護者が手をバスに向かって手を振る。教師が「手を振ってくれているよ。ほら手を振ろう」と言うと子供が「だって知らない人だから手を振ったらだめ」と答えた。

③ 日頃の避難訓練から身に付いたこと

新潟で地震があった時の保護者からのコメントである。



《考察》

- ・幼稚園の年間行事計画を立てる際、前年度の反省と現在の子供の姿から避難訓練を繰り返すなど、必要な活動を取り入れたり、外部の関係機関との連携を図ったりしてきた。これらのことから、子供たちは安全・防災意識を自然と身に付けたと考える。
- ・避難訓練は園だけでなく家庭でも生きていることが分かり、保護者とのコミュニケーションも図ることができた。
- ・外部機関と連携して行う安全・防災に関する教室は、「防犯教室」「交通安全教室」「防火・防災教室」がある。

子供たちが対象であるが保護者も自由参観することができる。親子で話し合いをすることにより、安全意識がより深まると考えられる。また、保護者が安全・防災意識について理解を深め、

家庭での安全教育の大切さを再認識する機会となると考える。

(4) 実践より明らかになったこと

① 幼児が安全に生活するための環境の在り方を探る。

- ・教師の役割は、幼児の年齢に応じて変化していくことが分かった。具体的には、年少の時では教師が繰り返しルールや約束を伝えることを通して、幼児が安全に楽しく遊んだり活動したりする意識をもつようになる。年中になった時には、自分たちでルールや約束に気付き、考えようとする姿がみられるようになってきた。
- ・幼児が自分の思いやイメージを遊びの中で十分に発揮できなかった際には、他の方法で思いやイメージを実現することで、満足できるような活動を取り入れることが大切である。幼児は自分の思いやイメージを十分に発揮し満足できると、約束やルールを自然と身に付けていく。
- ・幼児が失敗した経験は、幼児が自ら安全に関する意識を高め、その後の生活に生かせる経験になることが分かった。教師は、すぐに声を掛けるのではなく見守ることも大切である。
- ・約束やルールについて幼児に伝える方法を、担任だけではなく、教師間で話し合ったり他園の取組や意見を聞いたりして、取り入れることが大切である。
- ・幼児の興味・関心のあることを把握し、ねらいを明確にして、保育の中にそれらを生かすことが大切である。

② 保護者や外部機関との連携の在り方を探る。

- ・園での避難訓練や外部機関での体験は、思わぬ形で幼児の生活の中で生かされている。幼児の年齢や姿にあった経験や・体験を取り入れていくことは、幼児の安全に対する意識が高められると感じた。
- ・教師が保護者に伝えるばかりではなく、幼児が仲立ちとなって保護者に伝えていることもある。幼児が伝えることで保護者が安心し、教師や園に対する安心感・信頼感を高め相互の連携をよりよいものにしている。

(5) 今後の課題

- ・年齢に合った安全に対する意識を高める活動や環境にはどのようなものがあるかを探る。
- ・自園に合った安全・防災意識を高める取組にはどのようなものがあるかを探る。
- ・外部機関との連携の取り方を引き続き探る。

(6) 協議の概要

① 質疑応答

Q：飛行機を思うように飛ばせず、暗い表情をしていた子供たちのその後を教えてほしい。

A：遊戯室で思い切り体を動かして飛行機になりきって遊んだことで、子供たちの満たされない気持ちは少しずつ解消されていったように思う。

② グループ協議（発表についての質問や感想・自園での取組・テーマについての課題や悩み）

- ・外部機関での体験をぜひ取り入れてみたい。保護者も一緒に参加し体験を共有することで、家庭内においても安全への意識が高まり、さらに効果的である。
- ・園生活の中では、登降園の際に駐車場から玄関に入るまで、保護者が送迎することになっているが、事故やけがのないように、今後も安全指導に気を付けていきたいと改めて感じた。

- ・幼児が、園生活の中で危険だと思う箇所を、園内マップにシールを貼って表示したり、「ろうかはあるこう」などのポスターを描いて掲示したりしている事例が参考になった。
- ・危険な場所やヒヤリハットの事例等は、職員全員に伝わらないことが多い。職員全員が共通理解できるように、伝達方法を具体的に考えていきたいと感じた。

(7) 指導・助言

① 幼児が安全に生活するための環境の在り方

- ・幼児は普段から身近な大人の行動をよく見ている。園生活の中でも教師の安全に対する言動を自分のモデルにして、様々なことを学んでいる。
- ・幼児にとって「楽しさ」は大事なことである。しかし、時には安全面への配慮からその行動を制約されることもある。今回、飛行機を飛ばせなかった際、教師が遊戯室で飛行機になりきって遊ぶ機会をとったように、幼児の特性を受け止めながらも、自分の気持ちを調整する力を育てることが大切である。
- ・「一緒に考えようか」という教師の言葉掛けが、言葉でやりとりをしながら問題を解決していく幼児の姿につながった。自分の気持ちを言葉に表して相手に伝えたり、相手の話を聞いたりする力を育むとともに、教師に認められたうれしさが主体的にルールをつくろうとする意欲を高めている。
- ・積み木を片付ける方法について、幼児の話合いから出てきた内容を、写真で表示したり、床に線を引いたりするなど、幼児の考えを生かして視覚的に示したことが、この後どのようにすればよいか共通理解する上で効果的であった。
- ・幼児の安全を守るために、物的、人的環境を日々見直すとともに、幼児に自らの安全を確保することのできる基礎的な資質・能力を育成することが大切である。このことは、生涯にわたって命を守ることにつながる。

② 保護者や外部機関との連携の在り方

- ・防災機関を利用して強風体験や地震体験等貴重な体験をすることは、災害等の恐ろしさについて実感を伴って幼児の記憶に残すことになる。体験をその後の指導や安全意識の向上に生かしていきたい。
- ・幼児が様々な体験をすることはとても大事である。保護者や外部機関、地域へ、園から情報を発信し、「みんなで守り育てる」意識をもつことが大切である。
- ・「この遊具を使うと、もしかしたらこんなことが起きるかもしれない」という「もしかしたら」をできるだけ多く想定する。報道等で知ることができた事故や過去の出来事、他者の経験を、自分自身にも起こりうることとして認識したい。